変革の中の日本とアジア

――多文化的価値観の創造的対話――

武　田（長）清　子

今日は、アジア文化研究所長の Dr. Steele が何でもいいから話せとおっしゃるので、少し気楽に研究所の歩みを振り返って、（最初は研究所と呼ばないで、機動的であるために、あえて研究委員会と呼んできたのですが）、研究所の初期の思い出話を少しさせていただき、後半では、表題にかかげました「夢」と言いましょうか、大きすぎる題をつけたのですが、変革の中にある日本とアジアをめぐっての一つの “vision” というか、「夢」をお話ししたいと思っております。よろしくお願いいたします。

I

最初に ICU でアジア文化研究を始めた頃、ICU の人達は教師も学生も、皆、眼は西洋に向かっておりました。敗戦後の日本ですから、「15 年戦争」で日本は遅れている、先進西洋諸国に追いつかねばならない、西洋の新しい学問、new technology、new sciences を身につけなければいけない。そういう関心が圧倒的に強いという印象でした。ICU の大多数の人達が西洋だけに眼をむけるのではなくて、アジアにももっと関心を持ってほしい。日本はアジアの一部なのだ。アジアとの間に橋を架けなくてはいけない、アジアの研究が非常に大事だと思ったのですが、初期の ICU においては、アジア研究は非常に孤独な歩みでした。また学問的に指導的立場にある方々でも、日本の古典とか古代のインド哲学とか古い中国の文学や歴史の研究は、学問として意味があるが、近代の日本や中国、近代アジアは学問の研究対象にはならないというような考えが強く、また、そう発言される方もありました。今から考えると不思議なような、隔世の感があります。現実にはお金の話になりますが、アジア文化研究には活動資金もありませんでした。

ここでちょっと寄り道をするようですが、ICU を創設するに際して、日本で行われた募金運動について触れておきたいと思います。1950 年 6 月勃発した朝鮮戦争前に行われた日本における募金運動（一万田尚登日本銀行総裁が後援会長）は予想をこえた成功をおさめ、この広大なキャンパスの土地を購入することができました。しかし、多方、朝鮮戦争勃発後に開始されたアメリカの募金運動（大学運営費を分担する予定）は失敗に終わったのでした。当時アメリカで

は、マッカーシズムの嵐が起こっており、中国に共産主義の政権が成立する。アジアが共産主義化するのではないか。こういう風潮の高まる中、第二次大戦直後、日本を democratize する為に支援したいと思っていたアメリカ人の心がスーッと冷えてしまったんですね。従って大がかりな募金を請負ったタンブリング・ブラウン社が 60 万ドルを投資して募金活動を開始したが、8 万ドルくらいしか申し込みがない。こうして募金運動は失敗に終わり、そのショックによるのか、社長のブラウン氏は急死、ICU 支援の募金責任者である Japan ICU Foundation のディッフェンドルフアー会長もつづいて突然死去するということがありました。アメリカの募金運動はこのように失敗に終わったのですが、人類平和と和解のために、この新しい大学の創設に協力しようと決意し、約束したことを大切に守り、アメリカのキリスト教各教派の人々が、湯浅八郎学長の表現によれば、「献血」のような献金によって集めたお金を少しずつ送って、支えてくださったのでした。しかしこういう状況の上、学生の学費は非常に安く、開学当時 ICU は日本の外の社会で考えられていたよりも、経済的には非常に苦しい状況だったわけです。

アジア文化研究の活動を開始するに際しても、湯浅八郎学長は大らかで、すばらしい方ですから、「アジアの研究は大事だ。私が委員長になってあげるから、好きなようにしなさい。何をやってもいい」といって下さる。しかし、予算を大学から受けるということはないわけです。何をやってもいいが、もちろん director としての特別な pay もありませんし、program の予算も充分にはない。そういう状況の中でアジア文化研究委員会の研究や編集の仕事を、ICU 教員の一つのヴォランティア活動として始めていくというのが初期の状況でした。非常に困難ではあったが、それだけに非常に自由だったといえます。今は、日本社会全体としても、また、ICU においても、アジアへの関心は非常に強くなっていますから、今から考えると、全く隔世の感がありますね。

アジア文化研究委員会は、1958 年から始めたのですが、研究活動の第 1 の課程は「キリスト教とアジアの文化」の研究、特に日本と中国に重点をおきました。第 2 は「思想史の方法」についての研究です。「日本における思想史方法論研究講座」を、1959 年～1960 年にかけて大塚久雄、中村元、竹内好、家永三郎、丸山真男ら諸教授のご協力を得て、連続講座を開催しました。多くの教師、学生が参加して下さり、大きな意義をもちました。それは『思想史の方法と対象』（武田清子編、1961 年創文社）という本になり、日本の思想界で広く読まれ、12 刷まで版を重ねました。（この本の印税から講師への薄謝の外、残りはすべて研究活動の資金にあてたのでした。）ICU の中よりも、むしろ外の人々の方がたくさん読んで下さって、textbook に使って下さったというようなことも聞きました。

第 3 に、「アジアの文化・社会の変化」、その質を問うという意味での「近代化」という問題が研究テーマになっていました。ここでいう「近代化」とは、単に westernization とか、technological、あるいは、industrial modernization とかを意味する “hard” の面での近代化のことではない。そういう面もある程度含まれますが、キリスト教との出会いを通して、伝統的な価値観、人間観、歴史観、社会関係などがどう変化するかという課題の究明でした。そういう問

題を韓国や他のアジア諸国の学者たちと共に、比較研究するというような共同研究の活動もやっていきました。(これらは、年譜に詳述されていますので、それを参照して下さい。)

第4に「日本文化のアーキタイプスを考える」という課題です。それは、今日、後半でお話しする事につながります。それは日本文化、日本民族の深い無意識の領域、ユングがアーキタイプスと言うような意味での個人的、あるいは、集団的無意識の領域をどう探り捉えるかというような課題をめぐって研究会を持ちました。その報告は、『日本文化のかくれた形(かた)』(武田清子編、1984年岩波書店)と題する本になっています。

その他、アジア文化研究のための研究資料の収集という面では、この研究活動の初期から、日本と中国のキリスト教と思想史関係の図書の購入に努めましたが、そのために、Dr. E. Reichauer が director をしておられた Harvard-Yenching Institute から補助金を受けました。それらの図書は全部 ICU 図書館に収蔵されましたので、ICU 図書館は日本・中国関係の資料を豊富に蔵することができました。Dr. Reichauer の御好意に深く感謝しています。

もう一つは、「キリスト教の文献目録」の作成、及びアジア諸国(日本・韓国・中国・フィリピン・インド・インドネシア等)における「キリスト教(プロテスタンティズム)比較年表」の作成があります。日本語では『アジアにおけるキリスト教比較年表』(1983年、創文社)、英文では *Comparative Chronology of Protestantism in Asia* (1984年)として出版しました。これの完成には20年かかりました。この比較年表作成には、ここにおられる魚住教授、葛西教授、小沢浩さん(現富山大学教授)、岡田典夫さん(現茨城キリスト教大学学長)らもご協力下さいました。お二人は当時、研究所の有能な研究助手でした。今日は遠路わざわざ出て来て下さったことを嬉しく思います。United Board for Christian Higher Education in Asia からの援助により、台湾・韓国・インド・フィリピン・タイ・インドネシア等の諸国より次々に学者を、ある期間、ICU にお迎えして、それぞれの国の文化について講義をしていただくと共に、「アジア研究」の共同研究に参加していただきました。これらの活動は、ICU の学生達がアジアの問題を考える上に非常にいい機会になったと思います。このようなことが、アジア文化研究所の研究活動を模索的に始めた開拓期の思い出のグリンプスです。

II

次に、本日の主なテーマである「変革の中の日本とアジア——多文化的価値観の創造的対話——」について考えてみたいと思います。少し大げさな題になりましたが。今、アジアに起こっている変化をどう見るか？　戦争直後は民族主義 (nationalism) が盛んでした。他国の支配からの独立と国内の民主化という問題が、第二次大戦後のアジアの人々の大きな関心事だったと思います。もう一つは近代化への変化ですね。近年アメリカやフランスなどでは、自分達西洋人が 西洋的近代化、特に technological modernization をアジアその他の途上国に押しつけたのではないかという、自己批判といいますか、“guilty conscience” をもって、「近代化」ということはもう言わないほうがいいという意見が強くなっていると聞きます。それを猿真似して日

本人が「近代化はもう終わった。近代の超克だ」などというと、第二次大戦中、日本の反動的学者の言った有名な言葉の「オウムがえし」になるように思えます。アジア人にとっては近代化という問題は単に technological modernization だけを意味するのではなくて、それをある部分含みますが、根本的には、非人間的な伝統的価値観、人間観、社会関係の humanization の変革への関心を意味していると思います。女性を非人間的、非人格的に取り扱う女性蔑視の女性観に代表されるような差別的人間観、精神的、物質的に人権を踏みにじるような秩序や社会制度等からの人間の解放の課題はまだ沢山あります。インドのカースト制度に見るような階級的差別、アイヌやアボリジニのような先住民の少数民族に対する差別と不当な土地略奪もあります。その他多様なvisible な、また invisible ないろいろの差別があります。そういう文化・社会の基本に厳然と存在する、人間を非人間的に取扱う問題の克服が「近代化」という課題にはこめられていると思います。そういう意味での変化は、まだ on going な未解決の問題ですね。

先程から globalization のお話事が出ておりますが、インターネットの発達によって国境を越えていろいろな情報が行き交う今日、国際化の大きな波が押し寄せています。タイやインドネシアに起こる混乱はヘッジファンドと呼ばれる妖怪が駆けめぐっているからだなどといわれる現実を考えますと、globalization はいいことなのか？　私は経済は専門ではありませんが、何が出てくるのかわからない、不気味な未来を感じさせるような印象を受けます。最近も日本経済新聞にマレーシアの戦略国際問題研究所の所長の方が書いておられましたが、IMF 方式だけではアジアの経済危機は解決しない、我々はどんなに批判されても我々の国の方法で解決しようとしているのだということを言っているのを読みました。これは、グローバリゼーションの唄い文句で西洋諸国の方式がおしつけられることに対して、アジアの独自な状況をふまえて問題を処理しようとする姿勢を示すものとして興味深く思いました。

ところで、“hard” の面の西洋化、即ち物質的、技術的な意味での「近代化」への批判、反動から今日アジアの特殊的文化、伝統を重視する考え方も、一方強まってきています。それは大切な問題をも含んでいますが、価値観の内実の十分な検討、考察もしないで、古いアジア的なものを手放しにそのまま肯定する考え方は、うっかりすると反動的保守主義に陥る危険性があると思われます。非人間的な考え方や人間関係、社会制度を温存することに結果しかねません。

文化や思想の領域で問題を考えてみますと、今日、文化的交流が非常な速度を増してきている。世界全体にわたって国境を越えて文化的交流が盛んになってきています。国境を越えて多様な文化が交流するという現実にあって、多元的文化の共存という事が今日重要な関心事になってきています。今日、私は、この問題に関して、その根底にあって問われるべきことについて、皆様と御一緒に考えてみたいと希っています。

今、大きな変革が渦巻いているアジアにあって、多文化的な価値観が交錯しています。それは興味深い問題ですが、たとえば、女性蔑視や伝統的な差別観などを混在させたままの特殊的文化のあるがままの併存的共存に終わる可能性もあります。それぞれの特殊的文化に humanization の方向への価値観の変革をさそいだし合うような「創造的対話」の道を探るということ

はできないか？　そういう課題があるように思えます。

アジアという概念もいろいろあります。それを余り広げないで、今、私が、アジアという場合、韓国・日本・中国・フィリピン・タイ・ミャンマー、マレーシアからインドネシア・スリランカ・インドへと南北に連なる多元的文化圏に限定して一応考えてみたいと思います。この文化圏の間の対話という問題を考える上に、European Unity と比較してみますと、これは、丸山真男教授がよく言われた事なのですが、ヨーロッパの場合には、ローマ・カトリック教会、つまり universal church、そして、神聖ローマ帝国に象徴されるようなヨーロッパ共同体があった。(勿論、その背景にはもっと古い基礎文化が多様にあったことは事実ですが)。そういう一つの世界の中における多元的分裂が近世ヨーロッパの民族国家であり、近代国家であったといえると思います。そして、そのようにして展開していったヨーロッパ諸国が、もう一度 European Unity に戻るという場合には、何か一つ、common denominator というか、公分母になるものが文化の底にあると思えます。

それと比較してみますと、アジアの多元性というのは、これは非常に質が違っています。アジアは、いうまでもなく、儒教圏、仏教圏、イスラム圏(日本は神道イズムですが、仏教や儒教を受け入れてそれらが神道的土壌の上に折衷されて共存している)等といった考え方も成り立ちますが、それで共通の公分母なり、文化的共通基盤を持つといえるかというと、そうもいえない、違いが目立つように思えます。他国の植民地支配を長年にわたって受けた国の場合には、元の宗主国との文化的な関係の方が、地理的に近い隣国のそれとよりもより近いという面もあるように思えます。European Unity の場合でも、一つの通貨を認め合うだけでも大変なようですし、それぞれに文化の違いがありますから、European Unity は一つの Christendom が分解したのが元へ戻るといっても難しい問題をはらんでいることは充分に察しられます。しかし、アジアの場合、非常に異質な多元性を内包する文化圏の中に共通の価値観的対話の通路をどう作るかということは、非常に困難な課題であり、冒険的、開拓的な試みだと私は思います。

そういう試み、こうした問いを持っての探求という意味で、私はさきに「日本文化のかくれた形(かた)」、(「日本文化のアーキタイプス」)の発掘ということにふれましたが、このようなアプローチを、アジアの多元的文化圏に適用して考えられないか、アジア諸国の人々と共に、それを、今日、共同で探求することはできないものだろうかという課題を考えたいと思うわけなのです。「アジア文化」の「アーキタイプス」を共同で掘り起こすということができるだろうか？　これが私が問いかけたい課題であり、ひとつの「夢」です。

私はユング (Carl G. Jung) の集合的無意識、集団的無意識というものに大きな関心を持ってきました。「無意識」という課題につきまして、精神的分析学のフロイト (Sigmund Frend) の「夢判断」は、無意識に至る扉を開いた最初の仕事として重要です。しかしフロイトにおける無意識は、抑圧された欲求が蓄積された場所、社会的に承認されない暗い、「わき立つ大釜」ともいうべき暗い力、危険な悪への力としてとらえられています。ところが、ユングのいうアーキタイプス、ことに shadow archetype (影アーキタイプ)に私は民族文化の深い根底にあるもの

を見抜く上に一つのヒントを与えられるように思えます。デカルトのいう「主観」「自我」「意識」などは氷山の頂上の僅かな部分であり、その底に広大な無意識の領域があるのではないかという考えにある同成を覚えます。文化の深層、奥深くに意識にとって「永遠に創造的な母」ともいうべきものがかくされているのではないか。深い底に何か、隠れた形で生の根源的な規範性、人間の洞察や創造性の泉、秩序の源泉のようなものが隠されているのではないか。それは人類に共通の巨大な精神的遺産ともいえるようなものであって、それが、古い、深い文化の底に潜在しているのではないか。それを解読するよう、呼びかけともいうべきある「メッセージ」が、私共に送り続けられているのではないか。ユングやレヴィ・ストロースらはそういう問いかけをしているように思います。そういう問いをもって、アジアの人々と共に、それぞれの民族文化の深みからそういう「創造の母」ともいうべきものを発掘できないかということです。民族文化の集団的無意識の奥深くに「普遍的価値」につながるものの「泉」を掘りあてたい——そういう願いをもっています。

私が昔、アメリカのユニオン神学校(大学院)で学んだ世界的思想家ラインホールド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) の「祈り」として広く知られている「祈り」があります。

> “Oh God
> Give us serenity to accept
> What can not be changed.
> Courage to change
> What should be changed.
> And wisdom to distinguish
> The one from the other.”

1945 年「アメリカの母」を選ぶ全米各州代表の会で、前年度のアメリカの母だったジョージアナ・F. シブレー (J.F. Sibley) 夫人が次年度の母に黒人のクレメント (Clement) 夫人を推薦した。当時はまだ人種差別の強い時代で、大多数が一斉に反対した。そのとき、シブレー夫人が、この「ニーバーの祈り」をささげた。そのあと、満場一致でクレメント夫人が次年度の「アメリカの母」に選ばれたということがありました。

この「祈り」は、私が今、問題にしているような課題に直接的につながる祈りではないのですが、それを少し飛躍させて、意味をひろげて受け取りますと、私共がアジアの indigenous culture (土着的文化)の内実、その質を検討する場合にも重要な示唆と洞察を与えるものを含んでいるともいえます。昨今、アジアの伝統の強調ということから、多神教的宗教ブームの現象がきわだっており、それは、オウム真理教にまで行くような、危険な要素をも含んでいるように思えます。その中に含まれた呪術的な要素、危険で有害な要素を排除する。何に “No”、あるいは “change” を宣告し、何を普遍的、人類的意味をもつものにつながる要素として、堀り起こし、保持し、発展させるか。その否定すべきものと肯定すべきものとの二つをどう見分けるか？ これは、非常に難しい、しかし、重要な問題ではないかと考えさせられています。そ

ういう懐の深いところに永遠の創造性の母とも言えるような要素があるならば、その創造性の泉をどう掘り起こすか？　そこから、今日のこの激動の現象に対して、どういう「メッセージ」を受けとめ、発信するか？　これは私の夢です。そして、こうした夢を共有して、アジアの仲間と共に共同作業としての共同研究ができないか。globalism、金融自由化などに引きずり回されないで、それぞれの文化の根底を検索するというような共同研究ができないものかという夢を抱いている次第です。今日は「夢」だけ話させていただこうと考えています。従って、多少ラフなお話になることをお許し下さい。

アジアの多様な文化の懐の深みから掘り起こしたい問題の一つに「自己超越の発想」があります。「自分を超えたもの」から「私」を見るという「自己超越の発想」、そういう考えの根がアジアの諸民族の文化の中にどういう姿で内在しているか？　いないか？　それは、人間の尊厳を考えさせると同時に人間の怖さ、人間の悪(罪)を洞察させる視点をもつかどうかという重要な問題につながります。

いつか、オクスフォード大学で私が日本思想史のセミナーを担当していたとき、そこで長年教鞭をとってきたある教授に、「この大学のリベラル・アーツの教育で何を一番大事にしておられますか?」と聞いた時、「個人にせよ、社会関係にせよ、国際関係にせよ、“悪” を見つけることのできる人間を育てたいということです。」というお話でした。これは大変重要なことだと思いまして、非常に印象深く、心に刻まれています。人間の悪の問題を深くとらえる人間観、「人間の尊厳」の問題だけではなくて、自己をも他者をも含めて「人間の怖さ」を知るということは人間理解における重要な問題だと考えられます。それは人間を超えた視点からしか、明確には認識できないことだと思います。

第 2 に、こうした問いは、民主主義的な社会制度、経済における社会正義の尊重される人間関係、モザイク的な平和的共存、つまり民主主義的な社会関係の基盤になるような普遍主義的な価値(考え方)が、それぞれが identity を持っている indigenous な culture の懐から掘り起こせるかという問いにつながります。

私は 1948 年のクリスマスから 49 年のはじめにかけてセイロン島(今のスリランカ)のキャンディーで、戦後初めてのアジアのキリスト教青年指導者会議が開かれまして、日本から初めて占領軍当局から出国を許されて参加しました。今日、インドネシアは困難な国家体制変革の問題をかかえているようですが、当時インドネシアはまだオランダに対する独立戦争のさなかにありました。それで私達は、インドネシアの学生運動には「独立を獲得するよう頑張れ」という電報をうち、オランダの学生運動には「あなたたちの政府にプレッシャーをかけてインドネシアの独立を早く認めさせよ」と電報を打ったことがあるので、よく記憶しています。独立当初、スカルノ大統領がインドネシア共和国の憲法制定の折、独立宣言の演説の中でいった「パンチャシラ(五原則)」(Pantja Sila) を宣言しました。これは、インドネシアの人々の心の中に古くから生き続けてきた文化的価値の花を手折って、それを結び合わせたものだといわれました。先ほど述べたような経験から私は、これに深い興味を持ってきました。インドネシアは、

何千という島があると聞いていますが、多元的な人々を一つにつなぐために唱えられた五つの原則「パンチャシラ」は、第一は「一人の神を敬う信仰」、第二は「人間尊重思想」、第三が「民主主義」、第四が「国の独立」、第五が「貧しい人間のいない社会を作る」。こうした考えが人々に identity を感じさせるような伝統的な思想として存在していたということを意義深く思います。スカルノはある言語学者の友人の助言に従って、パンチャシラと呼ぶことにしたといっていますが、彼は、人々に、もしもあなた方が五つの原理に反対ならば、それを三つにしてもいいと。それは “social-nationalism” と “socio-democracy” と「一人の神を信じる信仰」の三つにしてもいい。この三原則、トリシーラを一つにまとめて、一つの原則にしてもいい。それは「ゴットン・ローヨン」(Gotong-Rojong) だと。「ゴットン・ローヨン」というのは「協力」ということだ。これは static な家族原理よりももっと dynamic で、苦しみをともにし、苦しみを通して互いに助け合う事が「ゴットン・ローヨン」だと言っています。これが実現したかどうかは知りません。しかし、少なくとも国を始めようとするときに、このような思想を表明したことを興味深く思いました。*The Birth of Pantja Sila* という本を私は読んだことがあるのですが、その中でスカルノは、自分はこのパンチャシラの思想の形成のプロセスで、中国の辛亥革命の指導者、孫文の「三民主義」(民族主義・民権主義・民生主義)、つまり民族の独立と democracy と経済的平等(民が栄える、生活できる)から学んだと述べています。さらに、スカルノは、インドのガンディーから、nationalism が排他的な愛国心 (chauvinism) になる危険を警戒して、博愛主義ということを学んだとも述べています。孫文からもガンディーからも学び、そして、インドネシアの人々の懐の中にある願いを、「パンチャシラ」という五つの原則の中に表現しようとしているんだということを言っている。それが、混沌の中にある今日のインドネシアに通じるかどうかはわかりません。その問題は別として、植民地状態からアジアを解放しよう、新しいアジアを作り出す変革を模索し、道を切り開くために苦闘した指導者たちが、お互いにお互いの新しいアジアへの夢や理念を学び合っていたことは大変重要だと考えます。

そして、第二次大戦後、50 年を経て、今、私共は、それぞれの成長、発展を遂げたともいえる一方、新しい困難に直面しており、これからのアジアのあり方を追求してゆく上に、共通につながりあう価値の模索が求められているように考えさせられます。

「人間理解」の問題に戻って、伝統文化、伝統思想の底にあるものとして、「人間の自己超越」と「悪」の理解ということを考えてみましょう。インドのガンディーは、彼の独立運動の中で、インド人の不可触賤民 (untouchable) に対する差別を、「インド人自身の悪」だといい、これと戦い抜くことなしに、インドを植民地化する「イギリスの悪」と戦うことはできないといいました。そして、不可触賤民をハリジャン(神の民)とよび、彼らとともにアシュラムに住み、インドの解放と革新のために働いたことに私は深い共感を覚えるものです。「自分の中の悪」と戦わなければ、「他者の悪」と戦うことはできない。これがガンディーのサティヤーグラハ(真理を求め、それを実行すること)の思想の重要な点の一つではないかと考えます。私はインド思想の専門家ではないのですが。先程ふれましたラインホールド・ニーバーは、「宗教が、政

治思想に貢献しうるものとしてガンディの非暴力の抵抗思想ほど大きな貢献はない」といっています。政治思想におけるガンディーの宗教の貢献というのは、それは、「敵の中にある悪」と「同じ悪」の根が「自分の中」にもあるという事を知らさせることだ。人間の悪徳も善も共通の根をもっている。そういうことをガンディーの宗教思想は我々に知らさせるといっています。今日の世界では、テロリズムが盛んですが、ガンディーが非暴力と言う場合、その非暴力は、武器によるテロリズムを意味するだけでなく、人を憎むことも暴力だということです。こうしたガンディーの思想に私は大変興味があります。これは、アジアが生んだ貴重な人間理解に関する宝ともいうべき思想だと思います。

自己超越の発想は、人間自身に自分の悪を見抜かせることに深くつながっています。木下順二という日本の文学者は、「鶴女房」という日本の民話から『夕鶴』というドラマを作りました。「鶴女房」という民話は、怪我をしていたところを一人の若い百姓に助けられた鶴が美しい女性になって来て、その百姓のお嫁さんになるという話です。その民話をもとに、木下が創作したドラマ『夕鶴』では、「与ひょう」という百姓のところに、美しい奥さんになってきた「つう」(鶴)は自分の羽をむしって、鶴の千羽織を織って、愛の捧げものとして与え、与ひょうを喜ばせていた。ところが、その布がお金になるということを商人から知らされた与ひょうは、その布を売ってもっとお金を得ようという拝金主義の虜になってしまって、「もっと織れ、もっと織れ」と要求するようになる。そうすると二人の間に対話が成り立たなくなったしまう。人間関係が崩壊してしまう。鶴はやっと飛べるほどまでに羽をむしり取って、最後の鶴の千羽織を織って、それを彼のもとに残して、夕焼けの空に飛び去って行ってしまう。「与ひょう」は一人残される――という美しいドラマです。これは日本の人々が大変愛好する民話劇です。これは、日本の農村地帯のあちらこちらに伝統的にあった「鶴の恩返し」という民話を、もっと深く、人間のエゴイズムというか、sinfulness というか、人間の自己中心的な罪の問題につながる「悪」の問題として掘り下げて、人間をとらえています。この『夕鶴』というドラマは、日本の全国で 4,000 回以上も上演され、どこの地域においても、老いも若きも皆喜んで観るドラマになっています。これは自己超越の発想で、人間を見る視点を与えます。人々の懐にある伝統的「民話」の掘り起こし方の一例だと言っていいと思います。

浄土真宗の「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」。自分が善人だと思っているような者でも救われるのだから、悪人だという事が分かっている者はなおさら救われるという、「悪人正機」といわれる浄土真宗の教え。そこに「妙好人」の問題があります。私は「妙好人」に興味があって常々学ぼうとしているのですが、その「妙好人」というのは、まったく学問のない普通の人々である浄土真宗の信者であるが、美しい信仰によって最もすぐれて救われた人のことです。その妙好人は、「私が一番の悪人だ」ということを知っている人だということがいろいろ記録されています。これも、日本の文化的土壌の奥深くに潜んでいる土着の人間理解の興味深い洞察だと思います。

韓国の柳東植教授を一年間 ICU にお招きしていましたが、彼が韓国の「花郎道」(「風流道」)

について語られました。それは、自己とこの世に対する執着から成っているエゴイズムの世界を克服して天性に帰るという課題を含んでいます。これは、歌舞降神による集団的エクスタシーを主軸として祭天儀礼の伝統に基づく花郎の歌舞修練なのだそうですが、そういう民族的霊性の課題を花郎道において、柳教授は追求しておられます。このような問題をここで詳しくお話しする時間はありませんが、非常に大事な問題だと思います。私は柳東植さんと一緒にそういう共同研究やりましょうと言っているわけです。

話が長くなってはいけませんが、もう一つだけ言わせていただけば、例えばアジアの nepotism、縁故主義、縁者びいきの問題です。戦前の日本でも、家制度に立つ家族主義の問題が長く人々を、ことに女性を苦しめてきましたし、それをイデオロギー的に拡大した家族主義国家観に立つ天皇制は、日本国民をも、隣邦の方々をも苦しめたことは見逃せません。中国でも nepotism はひとつの大きな問題だといわれていますね。縁故主義、家族共同体尊重は、人間の連帯性、協力ということなどを養う上でも大切な面もあるとともに、閉鎖的になるとエゴイズムの巣窟となる危険性をももっています。中国史の専門家の小島晋治東大名誉教授に、私が責任をもっているある会議で中国の nepotism の話をしていただいたことがあります。中国の nepotism は、例えば太平天国の指導者、キリスト教を奉じたあの洪秀全でさえ一夫多妻であったこと、そして南京に新しい政府を作って、万人は神様の下に平等だと言いながら、指導層の中核は実に血縁で強く固まっていたと言うことでした。洪秀全の太平天国の政府が後に分裂して、争いが起こってくると、もとの nepotism に皆帰っていってしまったというようなお話でした。毛沢東が諸々の地方を調査した時、共産党の細胞組織ができているが、細胞組織というのは実は家族会議のようだったと記録されているのを読んだことがあります。それは、共産主義になっても実際の村の生活では nepotism から全然変わっていないということを鋭く見抜いた記録だと思って読みました。今日の中国でも、社会主義化した革新社会を標榜しながらも、高官達の子女は一般人よりも優先的にアメリカとかフランスなどへ留学する機会をもっている。父親の公用車を使って避暑に家族で出かけるなどとよくいわれます。ネポティズムと社会正義の問題は、中国に限らず、他の国でも同様にあることかもしれません。

こうしたアジアの nepotism が全部悪いのではなく、アメリカ等では対極的な問題も見られるようです。日本でも非常によく読まれた本ですが、アメリカのハーバード大学の教授ダニエル・ベルは、その著書 *The Cultural Contradiction of Capitalism* (1976) の中で、資本主義文化の技術と dynamism の新しい現代文明の中で、人間が自己絶対的な、抑制のない欲望のとりこになっている。新しい快楽主義によってピューリタニズムの倫理が崩壊してしまっている。社会への帰属意識は、自分を超えた「あるもの」がなければ、連帯という意識や責任感は生まれてこない。ところが、そういう連帯感がすっかり失われてしまっていると、アメリカの capitalism の文化的矛盾を説いています。また日本でもある人たちの間で関心をもって読まれたアラン・ブルームが 1987 年に書いた *The Closing of the American Mind*、日本語訳は『アメリカン・マインドの終焉』（みすず書房）では、アメリカの大学においても、伝統的に重要視されて

きた教養主義教育 (liberal education) が失われることによって、人間とは何か、生きる意味は何かということが問われなくなっている。また、離婚家庭の子供がいま大学生の中に非常に多くなっているが、彼らは自分にも他人にも責任を持つというモラルの拘束を失ってしまっており、共同生活の営めない若者がたくさんできてきているという問題提起をしています。これは、アジアの nepotism と対極をなすところの、連帯性を失った人間社会の問題だともいえます。

私は周恩来が中国社会に根深い nepotism、縁者びいきの悪い慣習を克服するための規律を書き残していることなども興味深く思うのですが、話が長くなりますし、今日の直接のテーマではありませんから、ここではこれ以上、この問題には入らないことにします。

アジアの諸民族が、その土着文化・思想の底に持っている「人間理解」、特に「普遍的な価値」につながるもの、それの含む「悪」のとらえ方などを一例として、デッサン的にお話してきましたが、私は人間理解をめぐって、アジアの特有のアーキタイプスの共同研究を、北から南までの多元的なこの文化圏で行うことができれば、それは非常に重要な意味を持つのではないかと思います。そしてアジアの多元的文化価値を深いところで普遍的な価値でつなぐことの出来るものが発掘――創造できないか。アジアの多元的文化のそれぞれの文化の独自性を保持しながら、しかも、その奥底に、共通の価値観の公分母になるようなものを掘り起こすことができるような「創造的対話」、多元的価値観の創造的対話が、共同研究によって生み出せないか。これが、今日、私が皆様にお伝えしたい「夢」です。

どうもありがとうございました。